

1948 年読み書き能力調査の企画書「Literacy Research Program」について

高田智和（国立国語研究所）、久野雅樹（電気通信大学）、前田忠彦（統計数理研究所）
相澤正夫（国立国語研究所）、福永由佳（国立国語研究所）、横山詔一（国立国語研究所）

1. はじめに

1948 年 8-9 月に実施された読み書き能力調査（以下「1948 年調査」）には、GHQ/SCAP/CIE（連合国軍最高司令官総司令部民間情報教育局）が作成した調査企画書が存在するが、あまり知られていない。調査企画書は名称を「Literacy Research Program」（以下「LRP」）と言い、1948 年に民間情報教育局から読み書き能力調査の実施管理の主体となった教育研修所（国立教育研究所の前身）に提示されたものである。

本発表では、LRP には 1948 年 1 月版と 1948 年 3 月版の 2 種が存すること、LRP の内容の概要、1951 年 4 月に刊行された『日本人の読み書き能力』への影響について述べる。

2. 1948 年読み書き能力調査

1948 年調査は、第 2 次世界大戦後の占領下において、1946 年の第 1 次アメリカ教育使節団報告書に基づき、GHQ/SCAP/CIE の指示により、教育研修所を中心に読み書き能力調査委員会を設置して実施された。配給台帳等に基づくランダムサンプリングによって、全国 270 地点、15～64 歳の男女 16,820 人を対象に、全 90 問の読み書き能力テストを行い、その後の読み書き能力調査をはじめとして大規模学力調査や計量的社会調査の出発点となった調査である（木村拓也 2006）。調査の報告書は 1951 年 4 月に東京大学出版部から刊行されている（読み書き能力調査委員会 1951、以下「1951 年報告書」）

3. LRP 1948 年 1 月版

LRP の存在を指摘したのは勝岡寛治 1986 である。勝岡が取り上げた LRP は、民間情報教育局に所属したジョセフ・トレイナー氏の文書群に存する（Trainor Papers, Box 37 / Real 33. スタンフォード大学フーヴァー研究所現蔵、国立国会図書館所等がマイクロ資料所蔵）。1948 年 1 月 6 日の日付で発給された、Chief, Education Division, CIE 宛、Language Simplification Branch 発の文書（memo）に添付されたものである。この LRP は、1 ページ当たり 50 行程度のタイプライターによる英文文書で、全 13 ページである。作成日や作成者の記載はない。文言訂正の書入れが若干数ある。

文書本体には、調査計画の立案にあたって GHQ が相談した者の氏名（Prof. Takagi 〔高

木貞二〕(Psychology), Okabe〔岡部弥太郎〕(Education), Hattori〔服部四郎〕(Linguistics), Odaka〔尾高邦雄〕(Sociology) of Tokyo University; Pres. Mutai〔務台理作〕(Tokyo Bunrika and Kyoiku Kenshusho) and Mr. Hidaka〔日高第四郎〕(Mombusho)、〔 〕は発表者による補注)、調査の目的・実施方針、調査に必要な費用などが上申されていて、読み書き能力調査の計画・実施について GHQ 側の動きを知ることができる貴重な資料である。なお、文書本体には、当時 Language Simplification Branch に所属していたジョン・C・ペルゼルの署名がある。

調査の目的・実施方針について、原文をそのまま引用すると以下の通りである。

The program planned is one of fundamental research. Its objectives are (1) to provide data on the effectiveness of language learning and of communication through major written media, in terms of the linguistic, educational, and social factors that affect them, (2) to serve thereby as a guide for language simplification activities, for language education and for the language policies of media and (3) to develop, and train Japanese in the use of, fundamental language research techniques. The program requires the services of scholars from variety of fields and careful technical control; it cannot be carried out by the present personnel of any administrative agency like the Mombusho.

また、1951 年報告書の一般経過 (402 ページ) には「1 月 14 日 Pelzel 氏から Literacy Research Program の写しを受ける。」とあり、この 1948 年 1 月版の LRP が、民間情報教育局から教育研修所に提示されたものと考えられる。

4. LRP 1948 年 3 月版

民間情報教育局の文書群にも LRP が存する (GHQ/SCAP Records, Civil Information and Education Section (民間情報教育局 (略称: CIE) 文書) ボックス番号 5914; フォルダ番号 30、アメリカ国立公文書館現蔵、国立国会図書館所等がマイクロ資料所蔵)。目録カードに 1948 年 3 月と記載され、アイテムタイトルは「Literacy Research Program Distributed among the Committee Members」であり、これに従えば、1948 年 3 月の読み書き能力調査委員会の委員に配布された LRP ということになる。この LRP は、1 ページ当たり 55 行程度のタイプライターによる英文文書で、全 12 ページ (約 6,400 語) である。作成日や作成者の記載はない。1948 年 1 月版の校正を反映させた版であり、1948 年 1 月版を「ドラフト版」とすれば、この 1948 年 3 月版は「最終版」となろう。1948 年 1 月版と 1948 年 3 月版との異同は文言修正程度であり、内容は大きく変わらない。

1948 年 3 月版 LRP は、国立国語研究所研究資料室にも現存していることが最近判明した。資料群「fo0161「読み書き能力調査」資料」中に存し、文書類 30 点のうちの一つである。同資料群自体の国立国語研究所への流入時期や流入経路は不明であるが、1951 年報告書の執筆にあたった林知己夫氏 (元統計数理研究所長、1948 年調査に専門委員として参加)

の草稿も残されていることから、林知己夫氏本人または統計数理研究所関係者から譲渡された資料群であると推測される。また、国立国語研究所蔵の LRP には、「白石」の印が確認でき、1948 年調査に専門委員として参加した白石一誠氏（元統計数理研究所員）の旧蔵品であると考えられる。

なお、国立国語研究所研究資料室には LRP の和訳（全 38 ページ）も現存する。1951 年報告書の一般経過（403 ページ）にある「3 月 10 日 Literacy Research Program の英和プリントができあがる。」に符合するものであろう。

5. LRP の内容の概要

LRP の章立ては以下の通りである。

I. GENERAL

II. DEFINITION OF LITERACY

III. MEASUREMENT OF LITERACY

IV. PROBLEMS OF THE TESTING PROGRAM

V. PROCEDURE OF THE TESTING PROGRAM

VI. ORGANIZATION PLAN

「I. GENERAL」では、従来のリテラシーの定義や、リテラシーの測定についての問題点を指摘している、また、リテラシー調査の事例として、日本の壮丁教育調査や、アメリカの国勢調査や陸軍で行われた教育歴による推定に言及している。

「II. DEFINITION OF LITERACY」ではリテラシーの定義を行う。詳細は次節を参照。

「III. MEASUREMENT OF LITERACY」では、リテラシーの測定方法として、教育歴による推定ではなく、全成員を対象とした調査（テスト）が妥当であると述べる。

「IV. PROBLEMS OF THE TESTING PROGRAM」では、リテラシーに影響を及ぼす要因として、言語的要因（文字、語彙、文体）、教育的要因（教育歴）、社会的要因（性、年齢、職業、居住地）の三つを挙げ、各要因との関係を調査すべきとしている。また、リテラシーを診断する要因として、仮名・漢字の認知（字形から音を知る）と想起（音から字形を再現する）、語の意味の認知と想起、文章の理解の三つを挙げ、それぞれを測定するための設問について論じている。

「V. PROCEDURE OF THE TESTING PROGRAM」は、調査の具体的設計を述べた節で、LRP のおよそ半分を占めている。まず、調査全体を準備段階（1948 年 2 月 15 日まで）、テスト段階（1948 年 4 月 1 日まで）、分析・報告の段階（1948 年 6 月 1 日まで）の 3 段階に分け、スケジュールを設定している（実際には遅延した）。次に、テストに用いる語彙選定のために、一般に流通している新聞や雑誌の記事などを対象に語彙調査を行い、資料種別、文体、主題・内容によって分類・分析すべきと述べる。また、リテラシーに影響を及ぼす社会的要因・教育的要因について改めて考察し、地域を第 1 層とした層別サンプリングによ

る調査の実施を述べている。都市化の程度、地理的要因、文化的背景、経済的背景などとの関連が強いものとして、地域の有用性を説明している。また、欠格者や欠席者を見込んでサンプリングを行うべきとしている。

「VI. ORGANIZATION PLAN」では調査実施のための組織案を示している。

このように、LRP は当時の言語学、教育学、心理学、社会学、統計学の知見を背景に、当時の日本語表記と日本社会の分析のもとで記述された学術的資料でもある。

6. LRP と 1951 年報告書

LRP の内容は、1951 年報告書の「0. 調査の目的と今までの調査」「1. 調査の計画」を中心に随所に取り入れられている。例えば、Literacy の定義については、次の通りである。

【LRP 1 ページ】

II. DEFINITION OF LITERACY:

The ability to read and write in a population like the Japanese can be expected to vary within a wide range. It is hardly adequate, therefore, to define being literate as being "able to read and write". Literacy implies a degree and type of ability that can be compared and contrasted with other reading and writing abilities. Literacy can be considered a minimum, designated as such by the tester, among many possible abilities, and is thus a threshold of acceptable capacity.

The problem is — in terms of what criteria is the tester to determine that certain abilities indicate literacy, while others, whether above or below it or of a different type, do not do so acceptably. The concept of literacy implies an evaluation of different reading capacities in terms of some factor(s) other than those descriptive of the abilities within a population which do not give information in terms of which this evaluation can be made.

The definition of literacy in terms of use supplies one type of criterion, and is the one that will be used here. So-defined, literacy is the ability to use written language of the types and to the degree minimally necessary for the normal life of a member of the society.

"Normal life", of course, varies with the individual and sub-group within any society. In consequence, what is literacy for a peasant is not customarily literacy for a government administrator. And what is literacy for an administrator of very limited duties and talents differs from the literacy required by an able and protean administrator. Literacy defined thus, however, involves a vast number of separate definitions and is, practically-speaking, impossible to test. Nor is it, for the purpose of measures dealing with the population as a whole, a general-enough criterion.

【報告書 3 ページ】

§ 003.0 Literacy の定義

literacy は常識的に、‘読んだり書いたりする能力’というように考えられているが、そのような定義では科学的には不十分であると思われる。しかし、今までに literacy が科学的に定義されたことはない。

1 literacy という概念には、ほかの読み書き能力と比較し、対照することのできるある度合、ある型の能力ということがふくまれている。literacy は多くの可能な能力のうちで、調査者によって最低限度として示される能力と考えられる。すなわち、望ましい読み書き能力の最低の限界である。

2 literacy は、社会生活を正常に営むのにどうしても必要な度合、および型の文字言語を使う能力である 1)。もっとも、“正常な生活”は集団および個人によってまちまちであろう。したがって、農民にとって literacy であるものは必ずしも政府の行政官にとって literacy であるとはかぎらない。しかし、このように定義された literacy を実際上テストすることはできない。

1) このように定義された literacy は、したがって、この本では「読み書き能力」とは厳密に区別して使われている。

また、テスト問題の作成方法については次の通りである。

【LRP 7 ページ】

At this point, there are two possible ways to gather the material for the test questions, namely: (1) to select test entries, in the form of sentences and paragraphs, directly from the sample, or to construct test entries on the basis of general impressions of the sample, the choice being subject to the discussion and agreement of the entire test preparation group, or (2) to carry out a word count with a sampling ratio constructing a vocabulary list that will be a completely objective cross-section of style and subject-matter configuration, and to construct test entries from this list. The former method will be less time-consuming and, if subjected to the opinion of a number of specialists, approximately accurate. The latter will require a great deal more time and personnel but will be objectively more defensible.

(c) Construction of Test Materials: In this step, the principles set out in Section IV, B, above should be followed.

【報告書 18 ページ】

この点から、テストの問題を作るための資料をあつめるのに、ふたつの方法が可能である。すなわち、

1 テストの問題を sample から直接、センテンスおよびパラグラフの形で選ぶか、

あるいは、テストの問題を sample の一般的な印象を基礎にして作る。以上のどちらを選ぶかは、テストを準備する人たちゼンたいの討議と意見の一致とにまかされる。

2 語を、ある sampling 比率によってかぞえ、スタイルおよび事項の完全に客観的な切断面を示すような語集表を作り、この語からテストの問題を作る。

まえの方法は時間もあまりかからないし、もし数人の専門家の意見にまかされれば、ほぼ正確であろう。あとの方法は、はるかに多くの時間と人とを必要とするであろうが、客観的に見て、いっそう信用のおけるものになるであろう。

ここでは基礎概念と方法論に関する代表的な 2 例を示したに過ぎないが、LRP の文言が和訳され、1951 年報告書にそのまま取り入れられている事例は、このほかにも多々あるとの感触を得ている。

7. おわりに

本発表では、LRP には 1948 年 1 月版と 1948 年 3 月版の 2 種が存すること、LRP の内容の概要と報告書への影響について述べた。LRP 全体に関する内容の精査、1948 年調査に関する民間情報教育局文書群の調査が今後の課題である。

付記

本研究は、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用一言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—」及び国立国語研究所共同利用型共同研究「言語をめぐる社会調査史料の活用法に関する研究」による成果の一部である。また、国立国会図書館所蔵マイクロ資料の調査に際して、国立国会図書館利用者サービス部政治史料課占領期資料系の福山樹里氏のお世話になった。記して謝意を表す。

参考文献

- 木村拓也 (2006) 「戦後日本において『テストの専門家』とは一体誰であったのか？ —戦後日本における学力調査一覧と『大規模学力テスト』の関係者一覧」『教育情報学研究』4、pp.67-100
- 勝岡寛治 (1986) 「日本人の『読み書き能力』調査について—占領軍日本語政策の一環として」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊 (哲学・史学編)』別冊第 13 集、pp.103-117
- 読み書き能力調査委員会 (1951) 『日本人の読み書き能力』、東京大学出版部